

HIMALAYA

ヒマラヤ No.399



2005 FEB



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

日本ヒマラヤ協会

HAJ

ヒマラヤ400号記念原稿募集!!

HAJ機関誌「ヒマラヤ」は、来年(2005年)3月号で「400号」となります。編集部ではそれを記念して会員の皆様から下記のとおり原稿を募集しますので積極的な投稿をお願い致します。

記

1. 内容: ご自身の「ヒマラヤ地域での体験記」(研究・論文は除きます。HAJの「ヒマラヤ地域」とは、ネパール、インド、

パキスタン、アフガニスタン、ブータン、中国、カザフスタン、キルギス、タジキスタンの9か国です。)

2. 分量: 2,800字以内、写真2枚(プリント)
(裏に日時、場所などの説明を記入)
3. 締切り: 2005年3月末日
4. その他: タイトルを必ずつけて下さい。到着順に随時掲載致します。原稿料はありません。

野沢井歩前専務理事の追悼文〆切り迫る!!

締切日: 2005年3月31日 (なるべく早目に寄稿を!)

2003年10月2日、ネパール、ヒムルン・ヒマール峰で雪崩のため遭難死亡した、HAJ前専務理事、野沢井歩氏の「遺稿・追悼集」を、父・稔氏が出版されることになった。

9月6日に行われた一周忌の席上にて、関係者に追悼文執筆と写真提供の依頼状が手渡された。

発行者〔野沢井稔〕 編集者〔山森欣一〕

内容は自由ですが、第三者を不愉快にさせない

ように配慮。分量は「800~2,000字」程度。フロッピーの場合は必ずプリントも添付する。歩氏との関係の一つだけ明記。写真はサービス判紙焼一枚、撮影年月日、場所など記入し返却の場合はその旨記入。送料は執筆者負担。発刊後一部贈呈。

〔原稿と写真の送付先〕

〒134-0086 江戸川区臨海町5-1-3-603 山森欣一

表紙写真

1993年4月26日、チベット登山協会の「八千メートル峰14座登頂隊」の4名は、午前3時、6,700mのC3を出発し18時45分北面からアンナプルナI峰の登頂に成功した。ツェリン・ドルジェ、ペンバ・ザシ、レンナ、アカプーの4名である。まさに正面にそそり立つその北面ルートで、2004年10月10日名塚秀二は雪崩のため遭難死亡したのであった。(写真: アカプー/文: 山森欣一)

ヒマラヤ No. 399

1. 第2回『新日本ヒマラヤ会議・東京』を成功させよう!
2. アルガン・カンリ(6,789m)登頂 リタ・ゴンブ・マルワ
6. UIAA(国際山岳連盟)遠征委員会報告 レナード・モロ
8. 四川省: 甘孜藏族自治州登山規則 中村 保
12. ヒマラヤニュース〈トピックス・Books〉
16. 八千メートル峰年少/高齢実登頂者リスト
20. ブロード・ピーク入山者 [1977-2000=24年間]
24. 事務局日誌

第2回『新日本ヒマラヤ会議・東京』を成功させよう！

日本ヒマラヤ協会では、これまで毎年1月に「インド・ヒマラヤ会議」、2月に「中国登山研究会」、4月に「高所登山 事故と環境対策研修会」を開催し、ヒマラヤ登山を目指す愛好者への情報伝達と啓蒙活動を実施して参りました。

しかしながら、昨今のヒマラヤ登山愛好者の質的变化のためか、三つの会議への参加者は年々減少する傾向にあります。

本会ではそのような傾向について協議した結果、これまでの会議を発展的に解消し、従来のものを統合した内容の会議を2004年1月に「新日本ヒマラヤ会議」として発足させました。

その第2回会議を東京にて下記要領により開催致しますので、何卒ご参加戴きますようお願い申し上げます。どなたでも自由に参加できます。

記

1. 主 催：日本ヒマラヤ協会（H A J）
2. 日 時：2005年1月30日（日）9時半～17時
3. 場 所：『国立オリンピック記念青少年総合センター』
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1 TEL 03-3469-2525
『交通のご案内』 [地下鉄千代田線] 代々木公園駅 徒歩10分
[小田急線] 参宮橋駅 徒歩7分
4. 会費と申し込み先：
[一 般] 郵便局にある「郵便振替用紙」に住所・氏名・性別・電話番号を記入し3千円を納入下さい。
[口座番号 00100-6-48954、加入者名 日本ヒマラヤ協会]
[高校生] 無料です。住所・氏名・性別・学校名・学年を電話・FAX・ハガキにて、下記あてご連絡下さい。参加高校生にはH A J特製テレフォンカードのプレゼントがあります]
5. 問い合わせ先：〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7 萬栄ビル501号
日本ヒマラヤ協会 TEL 03-3988-8474
FAX 03-3988-8502
6. 定員と締切り：130名 定員になり次第締め切ります。
7. 日 程：[講師の都合により一部内容が変更される場合があります]
9：30 受付開始
9：40 開会挨拶
9：45 「インド、パンゴン山脈の山を登る」 沖 允人（中京山岳会）
11：00 「中国、カラコンロン山群初登頂」 小松由佳（東海大学）
12：00 昼食（各自でお願い致します）
13：00 「高所医学の基礎知識」 齋藤 繁（群馬大学大学院医学系研究科）
14：30 「テイクイン、テイクアウトの実践」 岩崎 洋（H A J常務理事）
15：00 「ネパール、事故報告・アンナプルナI峰」 山本季生（愛知県山岳連盟）
15：45 「ヒマラヤの雪崩遭難事故事例研究」 中川 裕（H A J常務理事）
16：15 「ヒマラヤ諸国登山、トレッキング情報」 H A J事務局
16：55 閉会挨拶
17：00 解散

アルガン・カンリ (6,789m) 登頂

リタ・ゴンブ・マルワ

いつかは高峰登山をと夢見ていた私に、2003年7月その機会が訪れた。女性隊でのアルガン・カンリ(6,789m)登山の正式許可が、インド登山財団の理事会から下りたのだ。その頃登山界は、エベレスト初登頂50周年記念でわいていた。私達も、お祝いの気持ちをこめて今回の遠征に挑むことにした。登山の季節としては5月が適していると思われたが、遠征は7月に行なうことになった。

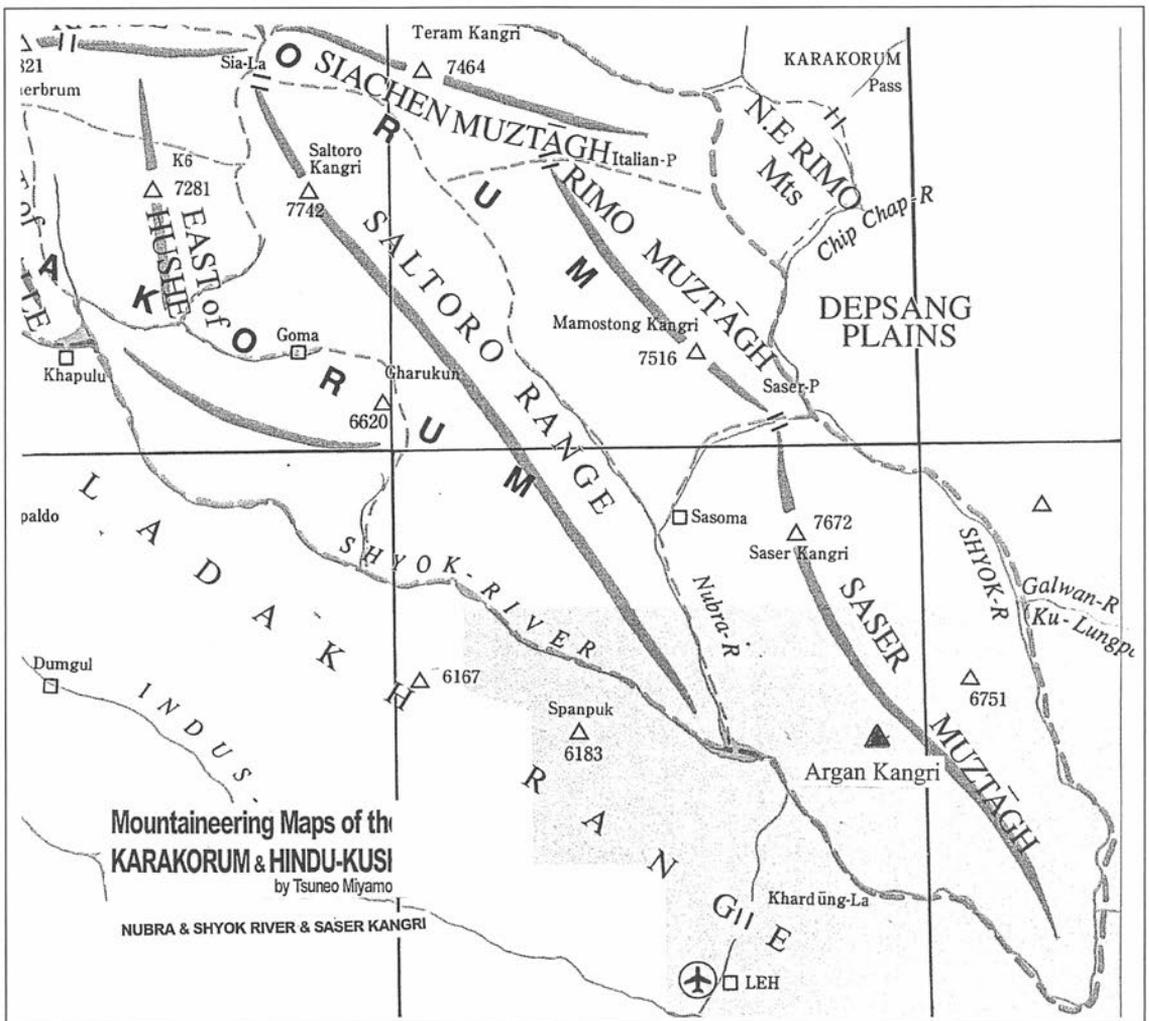
2001年、クリス・ボニントン卿ーハリシュ・カバディア隊がアルガン・カンリに挑んだが、雪の

状態が悪く登頂を断念している。

7月1日、デリーに隊員が集結。隊荷は空輸だと高くつくので、大方の登山用具他は、シェルパとともに陸路で現地へ送った。

7月8日、車道が通る所では世界で最も標高の高いカルドン峠を越えて、車道の終点Tirathへ。そこで小休止をとり、山の写真を撮影した。

9日朝、登りが始まるまでの1時間半はタールの道が続いた。さらに6時間歩き、そこから80mの急な下りを経てOtse-Kharに到着。この行程が、



▼アルガン・カンリ I 峰 (6,789m) ヤマンドカ (6,218m) から。手前はプナンマラ氷河



〔H J 58号カバー写真。マーク・リチェイ撮影〕

トレッキング中最もきつかった。Otse-Kharを流れる溪流は、Tirathの砂混じりの川とは違って澄んでおり、私達はその水で喉をうるおすことができた。翌日、約4時間の登りでPhonglasへ。そこからは小さな湿原帯から低木地、そして巨岩帯へと緩やかな登りが続いた。小雨が降る中、私達は好天に恵まれることを静かに祈った。

11日、Phonglasより2時間で、標高4,760mのBCに到着。平らに整地されているBCからは、けわしい山谷のYamandaka、その反対側には魚の尾の形をしたNya Kangriを望むことができた。翌日、伝統的な祈禱の儀式を行った。夕方の天候はよくも悪くも無い、といったところだった。翌朝7時、荷揚げのため、降雪の中を出発。後から太陽が顔を出し、ほっとした。C1までの2時間はモレーン帯で、途中三つの美しい湖のそばを通った。

C1からC2までは5時間。1時間半ほどモレーン帯の上り下りを繰り返しながら進むと、モレーン帯と氷河が入り組んでくる。氷河上にはむきだしのクレバスやヒドン・クレバスが多数走ってい

るので、モレーン帯をつなぎながら歩く。2時間ほど進むとKonto峠、Karpo Kangri、Argan Kangri 2峰及び3峰が見えてくる。C2が近づくにつれて傾斜は急になる。大きな茶色の岩壁下部を1時間半かけて回りこみ、C2に到着。

C2への荷揚げが終了した段階で、計画に若干の変更が生じた。C2から上部に設営適地が見つからなかったため、当初予定していたC3を無くして、C2からアタックすることにした。7月17日、休息日。朝食後、隊員を集めてアタック隊のメンバーを発表した。それまでの登山活動の様子から、メンバー選定は難しくなかった。Phulmaya、Sushma、KavitaそしてReenaの4人。メンバーから外れたBimlaとAyingbiは落胆して涙を流した。場の空気は沈んだが、それによって私の決断が揺らぐことはなかった。

7月18日、4人の隊員達が4人のシェルパ(Samgyal、Sangay Puri、Pasang Dorji、Dawa)とともにC2入りした。ザックが重かった上、日中の気温が上昇したせいで、C2まで5時間を要

した。翌日、上部ルート工作を行い、400mのロープを固定した。アタックの日は、午前1時に出発することになった。当日私達は、頂上が見える所まで山稜側に移動することにした。出発前、無線機のスイッチを入れると、興奮した声が飛び込んできた。「午前7時45分、山頂に立ちました！」私達は、アタック隊を祝福した。なんという素晴らしい知らせだろう。歓喜の交信が続く中、少々混乱が起きた。三色旗であるインド国旗を掲げるに当たって、アタックメンバーたちが、緑色の側が上になるか下になるか聞いてきたのだ。私は彼女達の混乱をおおめに見た。次の交信時間は10時とし、アタック隊は下山の途についた。午前11時、アタック隊はC2に到着。もうひとがんばりということになり、その日のうちにC1まで下ることになった。午後5時半、隊員全員が無事、C1に下山。長い1日だった。

翌日、遅めの朝食をとった後、隊員たちはYama-ndakaを望むことができる山稜上の、mandir(寺)

を訪ねた。このmandirは、ボニントンカパディア隊が建てたものだ。そこで感謝の祈りを捧げ、写真を撮った。登山を安全かつ成功裡に終らせることができた私達は、神に深く感謝した。

概要：2003年7月19日、Nubra谷のアルガン・カンリ峰(6,789m)に、インドの女性隊が登頂した。

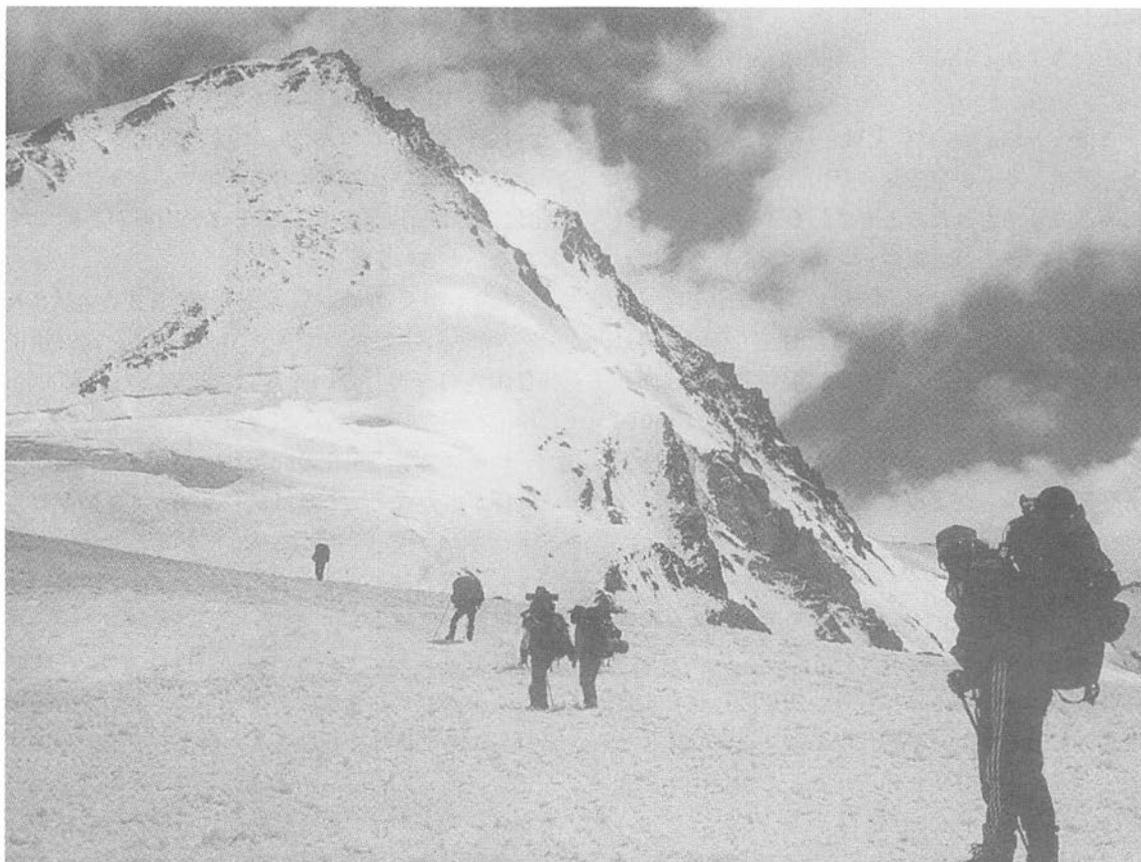
隊員：Rita Marwah-Gombu (隊長)、Bimla Negi Deoskar (副隊長)、Yana Bannerjee Bey、Phulmaya Tamang、Reena Kaushal、Sushma Thakur、Kavita Burothoki、Ayingbi Devi、Bhavne Jhadav

H J 編集者注：今回の報告と同座標、同標高の山に登頂した記録が、過去に発表されている。

「ヒマラヤン・クラブ・ニュースレター28号(1971年6月、Soli S. Mehta編)」

〔H J 60号より菅原愛里訳〕

〔注〕この地域の参考として「ヒマラヤ389号」に菅原愛里「新日本ヒマラヤ会議は楽しい」がある。



▲アルガン・カンリ(正面)を目指して氷河上を行く(H J 60号より、リタ・ゴンブ・マルワ撮影)

UIAA (国際山岳連盟) 遠征委員会報告

—2004年10月16日 ニュー・デリーUIAA総会—

遠征委員会委員長 レナード・モロ

ヒマラヤ諸国の現状

中国

中国登山協会(CMA)は、もはや高所登山を協会の重要な職務であると見なしていないようです。また、ほとんどの登山家は、地方登山協会と直接交渉をするほうがよくより安価に登山できる事を既に知りました。CMAは、増加する自国の登山家のトレーニングと競技の方へより多くのそのエネルギーを注いでいます。

最近チベット自治区、四川省にある、多くの未踏の6,000m峰に興味を持っている小さな登山隊が増えてきました。これは、日本人登山家、中村保氏(ジャパニーズ・アルパインニュース、AAJ、HJ、AJなど)によって国際的に紹介されたからです。

チベット登山協会(CTMA)に係る最新の問題としては、多くの登山隊の登山許可が、出発直前に突然取り消されたことです。CTMAの代表が語ったその理由は、東ニエンチェンタングラにおいて、複数の小さな登山隊が無許可登山を行った事が発覚し、当局がその後の登山許可を取り消したという事です。これからは、信頼できる代理人と交渉しなければならないでしょう。2004年の四川および西チベットへの遠征は、サービスに関する問題は無かったようです。

インド

インド登山財団(IMF)は、遠征委員会に代表を送り出しました。

登山許可システムは、最近の20年間にほとんど変わっておらず、今や時代遅れです。多くのエージェントがIMFからの許可なしでも登山が出来るようになることに同意している。

この状況の中で、インド・ヒマラヤは地域によって登山規則が異なり、ますます不明瞭になってい

ます。IMFによって遠征委員会に送られたメンバーにより、登山規則の改定やウェブサイトの更新により、こうした問題は解決されるかもしれませんが。州により登山料追加徴収されることについて、注意すべきです。

パキスタン

政府および旅行代理店との関わりに関する限りでは、パキスタン山岳会は機能していないようです。観光省との直接のリンクや影響がなくては、遠征委員会の実際の助けになれません。遠征委員会にメンバーを出している意味は現在ほとんどありません。

反対に、最近のパキスタン政府は、UIAAや旅行代理店の考えに耳を傾け、その結果6,500m以下の登山料の廃止に結びつきました。また、旅行代理店は、これが2005年は7,000m以下になるかもしれないとの見解であります。パキスタンでは、7,000m以下のピークでは登山料が必要なくなるかもしれません。

今年、多くの時間が、記念祝賀(K2とナンガ・バルバット)のために費やされました。2004年に登山許可を得た登山隊のおよそ90%は、8,000m峰(ノーマルルート)でした。

パキスタンの現在の問題はヘリコプター救助に関係があります。それはアスカリ・エアによって実行されます。各隊は6,000ドルのデポジットマネーを予め納めなくてはなりません。(あるいは代理人が保障する。)

コンコルディアからの救助費用は、今8~9,000ドル未満です。また、アスカリは、1つの救助飛行当たりではなく救助者1人当たりで請求しています。従って、異なる遠征からの3人のメンバーがコンコルディアから救助される場合、支払われた金額の合計は総計27,000ドルとなります。もちろん6,000ドルのデポジットが払われていなければ

ば、ヘリコプターは救助のために離陸しません。

現在最大の関心事は負傷したポーターの救助であります。遠征リーダーはポーターをヘリコプターによって救助させた場合、登山隊もしくはトレッキング隊が救助費用を支払う義務があることを知っていなければなりません。この様なケースをカバーする保険を持つ国はほとんどありません。

デポジットを支払っていないで許可地域をトレッキングしているパーティーが、ヘリコプターによって救助されることはありません。

良いところは、アスカリ・エアは今非常に効率的に救助を行っていることです。この夏、彼等は、シムシャル谷でフランスのトレッカーの困難で複雑な救助を行ないました。

K 2 登頂50周年の今年、バルトロ氷河の上では様々なトラブルがありました。大登山隊が、アスコルから同時に出発したため、ポーターが不足しました。

ある商業登山隊リーダーはスケジュールを維持するためにコンコルディアまでの片道、ポーターに倍の料金を支払いました。他のグループのポーターがより高い賃金につられて途中でグループを放棄し、いくつかのグループは立ち往生してしまいました。

同じく K 2 (8,611m)南東稜に登山した商業登山隊は、本隊が来る 1 か月前にパキスタンにシェルパのグループを送り出し、シェルパ達は本隊の到着前に7,000mまでのキャンプ展開を終えていました。

ネパール

ネパール登山協会は、今、トレッキング代理店として最も機能しています。それらのメンバーの多くはネパール登山連合(NMF)を組織しました。それはクライミング競技会を組織し U I A A のメンバーの一つになろうとしています。

エベレストではシェルパは6,000 (平均コストは約7,500ドルです) ドル未満で働かなくなりました。この春、他の山の登山の為にシェルパを雇う事は困難でした。シーズンになるとクーンブ・アイスフォールのルート整備する為にチームが生まれ、割に合わない仕事をしていることが報告さ

れています。「清掃登山隊」が未だに組織されていますが、これは問題の回答ではありません。各遠征はそれ自身の登山を清掃する登山隊であるべきです。他の国々と同様に、ネパール政府にとって環境問題とはお金儲けの口実であって、環境が損なわれる事に問題意識が在るわけではないのです。

環境保護費用は、登山隊が登山した地方の環境整備の仕事のために使用されるべきですが、しかし、それらのお金は、そうした地域までは届かないのが実情です。

ヒマラヤ登山の傾向について

現在のヒマラヤ登山は2つの顕著な傾向に集約されます：

- 1) 8,000m峰(ほぼすべてはそれに商業的組織・ノーマルルート)への登山。
- 2) アルパインスタイルもしくはカプセルスタイルでより低いピーク(6,500m以下峰)での技術的困難な課題を試みる小さなパーティーによる登山。

伝統的な登山を行っている登山家らは今、便利で、静かで、経済的にも割に合う、他のエリアで活動しており、多くの場合、質の高い登山が行われています。

酸素の使用

酸素ボンベを使用して達成された登頂と、そうではないものとを区別する必要がまだあります。酸素ボンベの使用量は以前よりより多くなっています。K 2 では明らかに以前より酸素ボンベが多く使用されています。

同様に、いくつかの8,000メートル峰では強力な商業目的での理由で酸素ボンベが多く使用されています。

一般に容認された制約内では、登山家が自由に登山することができるべきである一方、遠征委員会は、酸素の使用(また乱用)について注意深く声明を発表する必要を感じました。

(U I A A 遠征委員会の報告の一部を要訳。

文責：中川 裕)

中華人民共和国

四川省：甘孜藏族自治州登山規則

中村 保

2004年11月上旬に四川省甘孜藏族自治州の甘孜登山協会（Ganzi Mountaineering Association）を中村が訪問し、秘書長と面談、新しく施行される（2004年12月1日発効）する同州の登山規則の説明を受けた。甘孜藏族自治州内にはミニヤ・コンカを含む大雪山系、稻城県・貢嘎雪山三山、チョーラ山、ゲニ山塊、ヤンモーロン山塊など四川省内の6,000メートル峰を擁する山群の大部分が存在する。これらの山の登山許可の付与と管理は甘孜藏族自治州が主体的に行うというのが、新たに発令された規則の趣旨である。

その実施は、成都に本拠のある四川登山協会とも連携をとりながら行われるが、登山許可付与の決定権は同州にあると言う。四川省での登山を志向する登山家にとっては必読の内容である。ちなみに、規定の中には登山料のことは書かれてないが、登山料については中国登山協会の規定にしたがう。翻訳は仲間の横断山脈研究会の竹内康之氏にお願いした。（四姑娘山はアバ藏族自治州にあるので、この規則は関係ない）

甘孜藏族自治州登山管理暫時施行法

（甘孜藏族自治州人民政府弁公室）

2004年10月25日

（横断山脈研究会 竹内 康之訳）

第一章 総 則

第一条 甘孜藏族自治州内における登山活動の管理と健全な発展をはかるため、「中華人民共和国民族区域自治法」「中華人民共和国体育法」「外国人訪中登山管理法」「国内登山管理法」の規定に沿って、自治州は本法を制定する。

第二条 甘孜藏族自治州内の海拔3500米以上の山岳における登山、登攀、山岳スキー、グライダー、パラグライダー、および山岳トレッキング、探検等の活動（以下、登山活動と称す）は、全て本法が適用される。

第三条 甘孜州体育局は、自治州内の登山活動に対する主管部署にあたる。甘孜州体育局は甘孜州登山協会に依託し、関連する管理および業務を適切に遂行する。警察（公安）、観光、渉外、環境保全、林業等、関係のある部門と、山岳の所在する県級人民政府、郷級人民政府は、それぞれ責任をもって管理、監督を行なう。

第四条 甘孜藏族自治州内で登山活動を行なうには、国家の法律、法規を必ず遵守し、当地における民族の風習や宗教習慣を尊重しなければならない。

第二章 登山活動の申請と承認

第五条 登山活動を行なうには、実施する団体が以下の要件を備えなければならない。

- 1) 法人格をもつ機関・団体をととして申請する
- 2) 機関・団体が2名以上で、同時に省級以上の登山協会における登山知識と技能基礎訓練を受けていること
- 3) 団体には、医療機関における二級以上の健康診断に合格し、かつ障害疾患のない者
- 4) 隊員の安全にみあう防寒、通信、生活、医療等、基本装備を準備できること
- 5) 登山隊員および随行員に対する傷害保険の

加入（生命保険以外）

第六条 甘孜藏族自治州内で登山活動を行なう者は、以下に掲げる内容を記載した申請書を甘孜州登山協会に提出し申請する。

- 1) 申請人の国籍、姓名、性別、年齢、職業、住所、連絡先（電話）、電話番号、ファクス番号
- 2) 山岳名称、標高、地理的な位置
- 3) 登山期間、アプローチのルートおよび登山（登攀）ルート
- 4) 登山隊の人数およびその基本情報
- 5) 甘孜州登山協会が提供すべき業務、サービス内容

第七条 申請人は甘孜州登山協会に対し、申請時に以下の書類を揃えて提出する。

- 1) 登山計画書
- 2) 受け入れ機関・団体の法人資格証明書
- 3) 登山教練資格証明書
- 4) 登山隊員の健康診断書（身体健康検査合格証明）
- 5) 省級以上の登山協会発行の登山訓練合格証明（登山人員培訓合格証明）
- 6) 傷害保険の加入証明

第八条 国内の機関・団体は、甘孜州登山協会に申請書類を提出する。申請した日から30日以内に登山の許可を承認し、条件を満たしていない場合は回答ならびにその理由を説明する。

第九条 外国登山隊は国家体育行政主管部署が規定に照らし審査のうえ指示を与える。承認後は甘孜州登山協会が具体的な組織として実務にあたる。

第十条 承認して登山活動が許可されれば、申請人は甘孜州登山協会と協議し国家規定の登山登録費と関係部署が受取る排污費（汚染費?）を納める。確認後「登山活動批准書」を取得する。

外国登山隊は、承認の日から60日以内に甘孜州登山協会へ有効なビザとパスポートを示し、登山活動の協議を行なう。あわせて国家規定の費用を納める。

外国登山隊は、計画する山岳区域では国の規定にのっとり、また少数民族の伝統習慣を尊重しなければならない。

第十一条 外国人が甘孜藏族自治州で登山する場合は、自らの登山隊を組織することができる。また、外国隊と中国隊の合同（連合）登山隊を組織することもできる。申請された国内登山団体には、無断で外国人が入ってはならない。

第十二条 登山申請認証後、登山期間、登山ルート、山岳等に変更がある場合は、再度承認を得なければならない。登山隊が登山登録費を納付後、自らの理由によって登山を取り消す場合は登録費の返却を行なわない。加えて発行された批准書は無効となり、協議も終了する。

第十三条 登山活動の開始にあたっては、環境保護保証金制度を実施する。登山協議時に、申請人は関連部署に環境保護保証金を預けなければならない。登山活動終了時に、申請人が環境保護規定に違反していた場合は、環境の回復に充当し保証金は返還しない。

第十四条 国家・省をとおして許可された登山活動は、登山活動が始まる5日前までに甘孜州登山協会でその内容について確認しなければならない。そのとき 排污費（汚染費?）、環境保護保証金等の費用の支払いならびに関連する手続きを取るものとする。

第三章 登山活動

第十五条 登山隊は以下の規定を遵守しなければならない。

- 1) 批准された山岳と登山（登攀）ルート
- 2) 国の関係部署から出された最新の山峰名、高度
- 3) 申請人に附随して、他の人員が無断で登山（登攀）しない
- 4) 登山（登攀）ルートや山岳地の環境・衛生に配慮すること

登山行程で生じた廃棄物は、環境を汚染させてはならない。回収したり、埋めたり、焼き払う等の方法で、適切に処理することが求められる。ガラス、金属製食器、プラスチック製品等、消失しないゴミや電池、写真の現像液など、環境に対して長期に影響を与えるゴミは、必ず下まで持ち帰り、環境保護部門で処分しなければならない。

5) 野生動物、植物を保護する。けっして、捕えて殺したり破壊してはならない。

6) 事前の許可や手続を経ずして動物、植物、鉱物、もしくはその他の自然標本を採ってはならない。また、登山活動区域で記念する表示やその他の物を置いて（設置して）はならない。

第十六条 甘孜州で登山活動する外国登山隊は、さらに以下の規定を遵守しなければならない。

1) 登山前に、当地の随行員に対しても保険を付すこと

2) 登山行程中、あるいは登頂時には本国（地区）、国旗（区旗）、規格に合った中国国旗を携帯すること。批准時に同意するとともに、掲示しなければならない。

3) 甘孜州登山協会に、編纂された文書類や製作された音響映像資料を提供すること

4) 中国政府が主管する機関との承認を経ずに、その他の活動に携わってはならない

第十七条 外国人が携帯する登山用の装備は、必ず「中華人民共和国 国外登山隊に関する通関管理規定」に遵わなければならない。

第十八条 外国登山隊は、その登山活動期間を通じて、甘孜州登山協会が派遣する1名以上の連絡官を置かなければならない。その職責は、

1) 登山隊が中国の法律、法規と、少数民族区域の自治に関する規定を遵守しているか

2) 登山活動中に遭遇する問題解決の手助け

3) 組織と、従事する人員の業務・サービスの確認、登山隊に起きた紛争の解決

4) 登山の進行状況の掌握と手助け、登頂の事実確認

第十九条 甘孜藏族自治州内で登山する外国隊は、中国側の随行員に対し、医療、救急活動が生じた場合は助け合って対処しなければならない。連絡官の同意を得ずに勝手に随行員を解雇してはならない。また、当該活動を止めてはならない。

第二十条 登山活動の結果（登頂したかどうか）は、甘孜登山協会が確認後に「登頂証明書」を発行する。外国登山隊は国家体育行政管理部署によって確認後、「登頂証明書」を発給する。

確認にあたっては、登山隊は以下の資料を提供しなければならない。

1) 到達高度の写真・図面（構図の中に背景や対照物があきらかなもの）

2) 登山（登攀）行動を記載した記録（概説）

第二十一条 登山記録は甘孜州登山協会、甘孜州体育行政主管部署を経て確定する。その情報の発表や他の媒体等で利用することについて、全て同意する。

第二十二条 登山活動中に事故が発生した場合は、国際慣例に沿って迅速に処理する。登山隊はすぐに甘孜州登山協会、組織者、批准機関・団体に報告しなければならない。組織者等はすぐに救援隊を整え、該当地区の政府や関係方面と協力して対処する。

事故のニュース（消息）は、甘孜州人民政府体育行政部署の同意を得て、公開しなければならない。

第二十三条 許可を経ずに、登山隊の余剰物資を甘孜藏族自治州内で販売してはならない。

第二十四条 外国隊が、科学調査や測量をとまなう甘孜藏族自治州内の登山を行なう場合、「外国人訪中登山管理法」にのっとり申請しなければならない。許可を得ずに、区域内でその活動を実行してはならない。

第四章 罰 則

第二十五条 国内の登山隊が、以下に定める項目のひとつでも違反した場合は、県級以上の人民政府体育行政部署が予め警告を発し、登山活動の停止を命ずることができる。合わせて500元以上2,000元以下の科料に処する。

1) 体育行政主管部署との許可を経ずに無断で登山活動を始めること

2) 登山期間、登山（登攀）ルートあるいは対象山峰を変更し、その届け出を怠ること

3) 申請した人員以外を登山活動に参加させること

4) 許可を得ずに、登山活動区域で記念の表示やその他の物品を設置すること

第二十六条 外国人が本規定に違反した場合は、体育行政主管部署が「外国人訪中登山管理法」によって処理する。

違反の判断は、本法その他の規定によって関係

部署が処分を行なう。

第二十七条 体育行政主管部署の担当者が、職責を軽んずる、不正行為に加担する、賄賂を請求するなどすれば、行政処分に処される。また、犯罪を犯せば刑事責任が問われる。

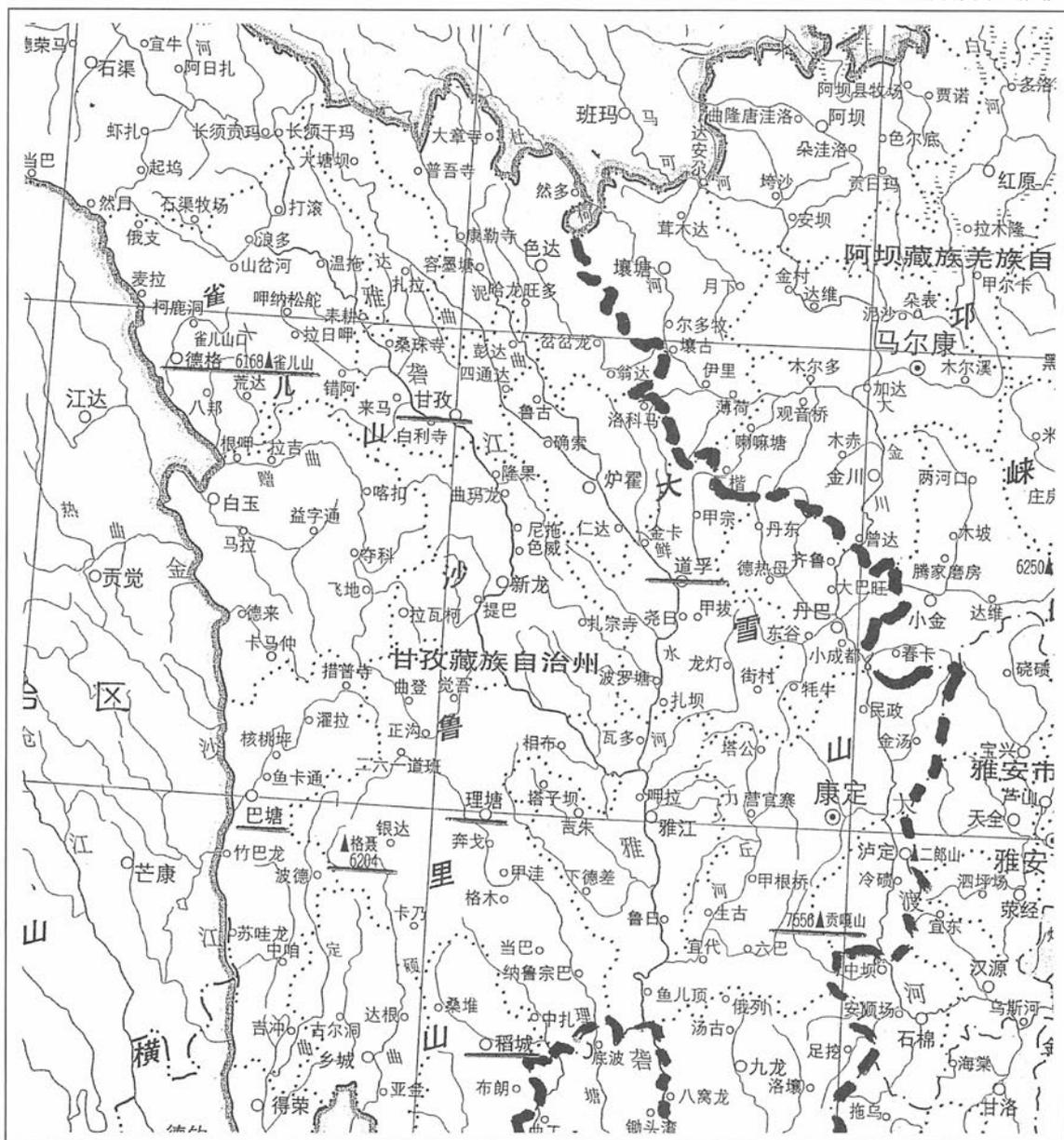
第二十八条 当事者がその行政処分に不服のある場合、同級あるいは一級上の行政主管部署に不服を申し立てることができる。また、直接人民法院に行政訴訟を提起することができる。当事者が、期限を過ぎてなお決定処分に従わない場合、処分決定機関は人民法院に対し強制執行を申請することができる。

第五章 附 則

第二十九条 本管理法を実施するにあたり、問題が発生すれば甘孜州体育行政主管部署がその解釈の責任を負う。

第三十条 本管理法は2004年12月1日をもって施行される。

〔甘孜藏族自治州図〕



ることを証明した。

A 4判 40頁 カラー4頁 2004年11月15日刊
〒780-0051 高知市愛宕町3-12-17

2003イエティ捜索隊全記録

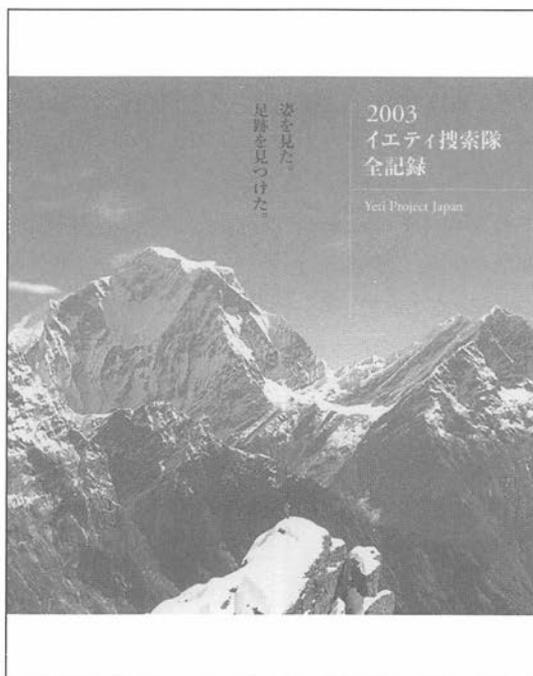
イエティ・プロジェクト・ジャパンが2003年夏から秋にかけて、ネパール、ダウラギリ山群に派遣した「イエティ捜索隊」の報告書。全頁カラーで「自動カメラ」を設置した捜索隊の行動が克明に報告されている。隊長の高橋好輝は今や日本のイエティ研究の第一人者であるが、今回の捜索の結果を「南東稜に現れた生物の考察」として纏めている。隊には八木原罔明、飛田和夫、村上和也などヒマラヤ登山のヴェテランたちが主力隊員として参加している。

アプローチから捜索現場までに住んでいる人や動物・植物が垂直分布で表示された美しいカラーの絵地図が報告書の価値を高めている。(山森)
B 5判 107頁 英文報告5頁 2004年10月31日刊
〒181-0012 東京都三鷹市上連雀2-20-20
高橋好輝 送料込み 1,500円

日本山岳文化学会論集(創刊号)

2003年3月に発足した同会が、その年の11月に開催した第1回大会の口演を纏めたもの。内容は、登山の成立とジェントルマン化意識(久保利永子)近代化と近代登山(藤原ゆり子)、山岳文化環境(田中文夫/鈴木広子)、文化探索山行の奨め-山を敬い畏れる心(中村純二)、高地生物の現況を考える(塚本珪一)、山名と山岳文化(徳久球雄)、但馬地方の狩猟習俗とその用具(仲村恒明)積雪期黒部別山(酒井國光)、牧水山岳紀行(大田顕成/養毛俊雄)、1.685%が物語るもの(山森欣一)、御嶽山から「自然公園法」を考える(小野木三郎)、残雪による斜面侵食(小林詢)アンカーのスリングングについて(松本憲親)、エベレスト・ベースキャンプ地域における環境活動(下嶋聖)、山のトイレとエコトイレ(穂苅康治)など。

B 5判 145頁 2004年11月20日刊 1000円
(送料310円) 〒136-0074 東京都江東区東砂
1-1-1-401 國見利夫方 日本山岳文化学会



ZANGSKAR

山田正文の写真集。著者は1989年から北インド、ザンスカール、ラダックの撮影を開始。美しい村、喜びの収穫、凍る川、春浅い山稜、そして花咲乱れる小川。確かにそこには著者が言う「私たちが見失いつつある大切なもの」が存在している。ザンスカールに行きたい!と心に響く一冊。(山森)

A 4判 100頁 100枚の収蔵写真の解説有り。
2004年11月30日刊 山と溪谷社 3,600円+税

変わる富士山測候所

江戸川大学・土器屋由紀子ゼミ編

日本からヒマラヤをはじめ世界の高所を目指す者で富士山に登ったことの無い者はまれであろう。錦繡の秋から6月の陽光が残雪に煌く頃まで、雪と高みを求めて登ってくる登山者は多い。そして、山頂に抜け出したとたん剣が峰に白く輝くレーダードームを見た筈だ。

本書は昨年秋、72年にわたって続いて来た「有人観測」を終えて無人化した「富士山測候所」に関わって来た人達の話を中心に、その歴史、現在、過去を検証し、未来について考えようとして出版された。

普段は知り得ない測候所内部のエピソードや、N

HKのプロジェクトXにも取り上げられたレーダー建設時の責任者である伊藤庄助氏へのインタビューなども興味深い。伊藤氏は言う。「推測ですがメンテナンスさえしっかりすればあと百年はもつと思います」庁舎の耐用年数の事である。

後半の「その未来」の項では、有人気象観測の使命を終えた測候所の有効利用について各分野からの提起がなされている。以前から測候所で大気化学観測を行って来た土器屋、五十嵐、高橋三氏による大気化学の観測を中心とした利点と意義。他の分野からも気象学、天文学、火山学、動植物の生態学の立場から。

そして、我々に最も関係の深い浅野勝己筑波大学名誉教授からも「富士山頂高所医科学・順応トレーニングセンター」及び「総合観測所研究センター」設立の提案がなされている。

複合的な活用のできる研究観測施設として測候所を新しくスタートさせよう。十シーズンの冬を山頂で過ごして来た私としても、順応トレーニングには最適の場所だと思うのだが…。是非、有効利用について考える切っ掛けとして欲しい。

(記：岩崎洋)

A 5判 250頁 2004年12月10日刊 春風社
1,800円＋税 〒220-0044 横浜市西区紅葉ヶ丘53 横浜市教育会館内 TEL045-261-3168

登山者・トレッカーのためのサバイバル救急・処置読本

Dr. Jim Duff, Dr Peter Gormy 共著
安田一郎 訳、野納邦昭 監修

本書は出発前の準備から始まり、携行する薬、予防と論を進め、診断の方法から緊急時の対応の仕方、事故者の搬送へと論を進めていく方法も理に適っている。その後、外傷や高山病、熱中症、低体温症と症例への対応の仕方が記されていて、実際の緊急の対応の手順にも通じている。

著者のジム・ダフ医師は1976年チャンガバンに始まり、エベレスト、K2など多くの遠征経験と、ネパールのペリチェやマナンでの長期滞在経験を有する、著名登山家でもあり、本書の内容はそうした辺境地帯での医療を想定している。一冊の本の中に、

豊富な内容が納められており、内容は濃く実際的で文章に無駄が無い。反面実に素っ気の無い文章となっているが、本書の目的は達しているといえるだろう。

評者は医療テクニックについて述べる能力を持たないので触れる事は出来ないが、簡単な図が多く用いられており、辺境地での知恵も多く含まれている。また、実際の対応については、目立つように網掛けが成されていて分かりやすく、事が起こったときに取り出して、このテキストを頼りに処置をしてもらうことを、著者は望んでいるのだろう。

実践に役立つものになっており、野外活動の救急処置のテキストとしては、実にコンパクトで、これなら実際にザックの中に入れておいてもそれほど苦にならないし、それなりの厚みなので悪天停滞のときなど、良い暇つぶしになりそうだ。(中川)

新書判 238頁 1,260円 本の泉社刊

雪崩リスクマネジメント

ブルース・トレンパー 著
日本雪崩ネットワーク 訳

異常気象が30年に一度の発生率なら、近年の暖冬傾向はもはや異常なことではないが、それにしても今年の暖かさ、雪の少なさ、あるいは降り方は際立っている。どのような「正月の山」になったのだろうか。

講習会などで毎回話されている事だが、ヒマラヤの遭難事故の2大要因は「雪崩」と「高度」である。1994年秋にH A J・ミニヤコンカ隊で遭難した福澤卓也氏の調査で示されたように、日本国内での雪崩遭難の約60パーセントが登山者自身が誘発した雪崩によるものであり、対して、ヒマラヤの雪崩遭難の70パーセントは自然発生によるものである(中川調べ)。そうした雪崩では、時に何の前触れもなく襲ってきた氷雪の嵐にただ成すすべもなく、幸運を祈る事しか出来ない。あるいは祈る時間も無い。先のアンナプルナI峰(8,091m)での佐藤敏雄、名塚秀二両氏の遭難はその典型である。

本書は、研究者の立場からではなく、積雪のある場所で、登山、スキー、仕事などを行なう人々の側からの視線で、雪の知識、積雪の構造、雪崩の仕

組、雪崩の予測と巻き込まれた時の救助方法などが記述されており、著者はスキー場などで雪崩を人為的に発生させて管理する雪崩のプロだ。経験に基づいて導き出された「考え方」を数多く提供してくれる。例えば、著者がこの本の中で最も読んでほしいといっている「地形」の章では、「凸型斜面では、統計上雪崩を多数発生させ、他の斜面に比べて雪崩事故が多い。この理由のひとつは、この斜面は本来安定度が小さい事にあるが、最大の理由は、僕が思うに、他の斜面より安全なルートファインディングに関する問題を抱えているからだ。」(68ページ)という具合である。

アメリカ西海岸では沿岸性、山間性、大陸性という雪崩気候の分類があると紹介されている。この事自体も知らない者には目新しい。もちろん日本で経験できるのはほとんど沿岸性、ヒマラヤは山間性と大陸性であろうか。ヒマラヤの雪崩と国内との差を考えるのに、役に立つ。最後に「ヒューマン・ファクター(人的要因)」の項が設けられており、雪崩遭難に関する数多くの危険(リスク)を回避する(マネジメント)「考え方」を本書は数多く提示してくれている。

「道具というのはしばしば、安全に関する間違っただけの感覚を与える。パーティの全員がビーコン、シャベル、雪崩エアバック、アバラングを携行している場合、そうでない場合には避けて通るような斜面を滑ってしまう。証明はできないが、ビーコンは人の命を助けるどころか雪崩による死者を増加させた、と主張する者がいても、おかしくはないと思う。ビーコンを置いていけというのではない。それでも常にこう自問する必要がある。ビーコンが無かったとしても、その斜面を滑ろうと思うか? 思わないのなら、そこにいるべきではないだろう。」(268ページ)

我が国では未だビーコンに対する認識が行き渡っていないと思う。しかし、一方でビーコンを持たなければ雪山に行くべきではない。という考え方にも同調できずにいる評者にとって、この本の著者の言葉には共感させられる事が多い。

一部の用語が説明不足であり、文体は今風の口語調で、最初の部分ではとっつき難さを感じる人も多いと思うが、それを我慢して読み進んでいけば、

役立つ情報がたくさん詰まっている。

冬山登山を行う者全てに読まれて良い本であり、特に、国外の雪山を目指す場合には、自分の経験と照らし合わせて出発前に必ず目を通しておいてほしい本だ。(中川)

A 5判 280頁 1,890円 山と溪谷社刊

[華甲望年会出席者] 敬称略・順不同

[華甲祝賀者]:

山森欣一、松館正義、督永忠子、大神田伊曾美、樋上嘉秀、山田慶周、中村正勝、

[出席者]:

斎藤義孝(日本勤労者山岳連盟理事長)、天城敏彦、天城素子、安藤斎、石川龍彦、居川康祐、井上功、上田京子、梅澤佳子、江尻健二、小野寺光義、大久保博、大塚ひで子、及川美奈子、堅田秀子、片岡泰彦、菊地薫、小室豊、小松由佳、近藤幸夫、小林正己、小林裕美子、佐藤邦彦、坂上真知子、笹原芳樹、澤田幸子、志村真由美、鈴木正典、鈴木雄一、鈴木一己、須田義信、須藤圭一、関根孝、田村正勝、高橋好輝、高橋久美子、堤信夫、辻野治子、出口當、寺沢玲子、飛田和夫、西嶋鍊太郎、野口道雄、野田文子、早川和子、長谷川和雄、橋本しをり、平田清志、古谷朋之、福山佑、藤田礼子、保坂巖、水野政雄、宮崎久夫、森山安次、谷田川武、山森美智子、吉武裕志、渡辺斉。

[HAJ] 会長、理事、監事:

酒井國光、八木原暁明、尾形好雄、岩崎洋、中川裕、睦好正治、林雅樹、保坂昭憲、中岡久

■財政支援:[10万円] 石川龍彦、[5万円] 中川 裕
[3万円] 谷田川武、[2万円] 佐藤英樹

東京集会のお知らせ

日時	1月31日(水) 午後7時~
内容	新年会
場所	H A J ルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分) 又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

八千メートル峰年少実登頂者リスト

[2004年12月31日現在・山森欣一調べ]

(注) 氏名の前の×は故人、fは女性。 *印欄は八千メートル峰登頂回数

順位	氏名	生年月日	山名	登頂年月日	年	日	*
001	田島 崇行	1977. 2.	ガッシャーブルムⅡ	1997. 7.14	20	155	
002	小西 浩文	1962. 3.	シシャパンマC	1982.10.10	20	209	VI
003	山村 武史	1982.10.	サガルマータ	2003. 5.22	20	215	
004	今田 賢二	1959. 4.	ガッシャーブルムⅡ	1980. 8. 2	21	111	
005	藤田 耕史	1969. 1.	シシャパンマC	1990. 5.17	21	131	
006	重川 英介	1974.11.	チョモランマ	1996. 5.11	21	166	
007	原田 智紀	1973. 2.	チャー・オユー	1994. 9.29	21	234	
008	加藤 慶信	1976. 1.	マナスル	1997.10. 8	21	254	V
009	大内 明弘	1979.11.	チャー・オユー	2001. 9.24	21	313	
010	×小林 俊之	1965.10.	アンナプルナⅠ	1987.12.20	22	53	
011	関 裕一	1975. 7.	マナスル	1997.10. 9	22	90	
012	平出 和也	1979. 5.	チャー・オユー	2001. 9.24	22	122	
013	山田 淳	1979. 5.	チャー・オユー	2001. 9.21	22	136	Ⅱ
014	谷山 宏典	1979. 2.	ガッシャーブルムⅡ	2001. 7.10	22	159	Ⅱ
015	f遠藤 由加	1966. 1.	ナンガ・バルバット	1988. 7.12	22	171	Ⅳ
016	渡辺 大剛	1981. 8.	サガルマータ	2004. 5.23	22	244	
017	松本 浩	1980. 2.	ローツェ	2002.10. 8	22	249	
018	田中 基喜	1948. 7.	マナスル	1971. 5.17	22	296	Ⅱ
019	高橋 和弘	1973.10.	K2	1996. 8.14	22	304	Ⅵ
020	辻 信広	1970. 9.	ブロード・ピークM	1993. 7.21	22	306	
021	吉田 裕一	1970. 8.	ガッシャーブルムⅡ	1993. 7.22	22	349	Ⅳ
022	秋山 剛	1970. 9.	チャー・オユー	1993.10. 8	23	21	
023	野口 健	1973. 8.	チャー・オユー	1996. 9.25	23	35	Ⅱ
024	豊嶋 匡明	1974. 8.	マナスル	1997.10. 8	23	43	
025	山根 智之	1967. 5.	ガッシャーブルムⅠ	1990. 7.16	23	76	
026	荻尾 雄二	1972. 7.	チャー・オユー	1995. 9.26	23	85	Ⅱ
027	岩下 頼人	1975. 2.	ガッシャーブルムⅠ	1998. 7.29	23	154	
028	荒井 俊彦	1971.11.	マカルー	1995. 5.21	23	196	
029	×福本 誠志	1973.12.	ガッシャーブルムⅡ	1997. 7.16	23	206	Ⅱ
030	f白沢 あずみ	1966. 9.	シシャパンマC	1990. 5.17	23	244	
031	上田 恵爾	1972. 1.	ダウラギリⅠ	1995.10. 6	23	264	
032	鈴木 茂	1955. 1.	ダウラギリⅠ	1978.10.20	23	286	Ⅱ
033	×佐野 崇	1972.10.	K2	1996. 8.14	23	293	
034	青田 浩	1958. 1.	アンナプルナⅠ	1981.10.29	23	297	Ⅱ
035	斉藤 順二	1964.10.	ブロード・ピークM	1988. 8.13	23	305	
036	石川 直樹	1977. 6.	チョモランマ	2001. 5.23	23	327	
037	谷川 太郎	1967. 6.	ブロード・ピークM	1991. 7.12	24	15	Ⅷ

順位	氏名	生年月日	山名	登頂年月日	年	日	*
038	上岡 鋼平	1973. 5.	ガッシャーブルムⅡ	1997. 7.18	24	49	
039	宮川 仁一	1971. 7.	チョー・オユー	1995. 9.25	24	79	
040	長久保 浩司	1969. 4.	ガッシャーブルムⅡ	1993. 7.22	24	111	V
041	竹内 洋岳	1971. 1.	マカルー	1995. 5.22	24	134	VI
042	天野 和明	1977. 2.	ガッシャーブルムⅡ	2001. 7.10	24	137	IV
043	横山 浩二	1967. 5.	ダウラギリⅠ	1991.10.11	24	140	
044	佐藤 光由	1961. 4.	サガルマータ	1985.10.30	24	197	III
045	春木 俊孝	1961.10.	ローツェ	1986. 5. 4	24	199	
046	三谷 統一郎	1958. 3.	ダウラギリⅠ	1982.10.17	24	201	VI
047	f 統 素美代	1967.12.	チョー・オユー	1992. 8.15	24	229	III
048	佐野 友康	1972.11.	ガッシャーブルムⅠ	1997. 7.16	24	231	
049	×加藤 保男	1949. 3.	サガルマータ	1973.10.26	24	234	IV
050	大谷 亮	1959. 9.	カンチェンジュンガC	1984. 5.17	24	245	
051	三好 学	1966.12.	チョー・オユー	2001.10. 9	24	308	
052	尾崎 隆	1952. 9.	ブロード・ピークM	1977. 8. 8	24	333	VII
053	田端 宏好	1969.11.	チョー・オユー	1994.10. 4	24	317	
054	大谷 篤	1972. 5.	ナンガ・パルバット	1997. 7.18	25	50	
055	綿貫 剛	1972. 5.	ガッシャーブルムⅡ	1997. 7.14	25	51	
056	花谷 泰広	1976. 8.	チョー・オユー	2001.10.11	25	66	
057	加藤 智二	1960. 5.	ガッシャーブルムⅡ	1985. 7.16	25	67	II
058	近藤 謙司	1962. 6.	チョー・オユー	1987. 9.20	25	82	III
059	花田 博志	1960. 3.	ナンガ・パルバット	1985. 7. 8	25	105	II
060	富田 雅昭	1956. 6.	マナスル	1981.10.14	25	112	
061	唐橋 芳和	1971. 3.	ガッシャーブルムⅠ	1996. 7.30	25	136	
062	中西 紀夫	1958. 3.	ナンガ・パルバット	1983. 7.31	25	141	II
063	服部 徹	1970. 1.	ブロード・ピークC	1995. 7.18	25	180	II
064	道脇 幸博	1957. 2.	マカルー	1982. 9.30	25	222	
065	寺田 勉	1968. 2.	チョー・オユー	1993.10.13	25	228	
066	山本 宗彦	1959.12.	ブロード・ピークM	1985. 8.12	25	248	
067	内田 健一	1967.12.	ブロード・ピークM	1993. 8.24	25	261	
068	×星野 龍史	1967.11.	チョー・オユー	1993.10. 8	25	315	V
069	日下田 実	1930. 6.	マナスル	1956. 5.11	25	319	
070	中村 和貞	1973.10.	チョー・オユー	1999. 9.28	25	336	II
071	野呂 和久	1951. 8.	ブロード・ピークM	1977. 8. 8	25	355	
072	山本 篤	1962.10.	シシャパンマM	1988.10.24	26	18	
073	×椎名 厚史	1970. 6.	K2	1996. 8.12	26	60	
074	×石坂 工	1965. 6.	マカルー	1991.10. 7	26	101	
075	山野井 泰史	1965. 4.	ブロード・ピークM	1991. 7.30	26	109	
076	森 章一	1975. 4.	ガッシャーブルムⅠ	2001. 8.13	26	109	
077	遠藤 晴行	1957. 2.	サガルマータ	1983.10. 8	26	222	

八千メートル峰高齡実登頂者リスト

[2004年12月31日現在・山森欣一調べ]

(注) 氏名の前の×は故人、fは女性。 *印欄は八千メートル峰登頂回数

順位	氏名	生年月日	山名	登頂年月日	年	日	*
001	f内田敏子	1931. 4.	チャー・オユー	2002.10. 1	71	172	
002	三浦雄一郎	1932.10.	サガルマータ	2003. 5.22	70	222	II
70歳代(2名・内女性1名)							
003	加藤幸彦	1933. 1.	チャー・オユー	2002. 5.10	69	100	
004	南井英弘	1935. 9.	シジャパンマC	2004. 9.27	69	7	
005	荒山孝郎	1935.10.	シジャパンマC	2004. 9.27	68	359	II
006	f折原幸子	1936. 8.	チャー・オユー	2003. 9.28	67	54	
007	鈴木昭	1937.12.	チャー・オユー	2003. 9.28	66	301	
008	政木通弘	1938. 2.	シジャパンマC	2004. 9.27	66	238	
009	石川富康	1936.11.	チョモランマ	2002. 5.17	65	176	VII
010	平田恒雄	1935. 2.	チャー・オユー	2000. 5.12	65	100	
011	澤田治之	1939.12.	チャー・オユー	2004. 9.27	64	284	
012	渡邊玉枝	1938.11.	ローツェ	2004. 5.15	64	176	V
013	f白岩靖子	1938. 6.	チャー・オユー	2002.10. 1	64	120	
014	青木正次	1936. 5.	チャー・オユー	2000. 5.12	63	362	
015	山本俊雄	1936. 7.	チョモランマ	2000. 5.19	63	311	II
016	f国枝宏子	1940. 1.	チャー・オユー	2003. 9.21	63	234	
017	鈴木克茂	1940. 3.	チャー・オユー	2003. 9.27	63	207	
018	f×大田祥子	1941. 3.	チョモランマ	2004. 5.20	63	80	II
019	山梨柁巳	1941. 7.	シジャパンマC	2004. 9.27	63	58	
020	大沢功	1941.10.	チャー・オユー	2004. 9.27	62	343	
021	平林丈彦	1942. 1.	チャー・オユー	2004. 9.27	62	264	
022	奥克彦	1937. 1.	シジャパンマC	1999. 9.16	62	242	
023	近藤和美	1941.11.	ガッシャーブルムII	2003. 8. 1	61	252	VII
024	村田博	1941. 1.	チャー・オユー	2002. 5.10	61	112	
025	小川武	1942. 7.	チャー・オユー	2003. 9.28	61	60	
026	今野一也	1939. 4.	チョモランマ	2000. 5.19	61	43	
027	f×坪山淑子	1942.12.	チャー・オユー	2003. 9.28	60	297	
028	三渡忠臣	1939. 8.	チャー・オユー	2000. 5.14	60	279	
029	斎藤惇生	1929. 9.	シジャパンマC	1990. 5.21	60	254	
030	×原田達也	1935. 4.	シジャパンマC	1995. 9.26	60	173	
60歳代(28名・内女性5名)							
031	大内一成	1941. 8.	ガッシャーブルムII	2001. 7.10	59	341	
032	桑原巖	1935.11.	ダウラギリI	1995.10. 6	59	337	II
033	谷口正彦	1939. 1.	チャー・オユー	1998. 9.26	59	244	
034	中島道郎	1930. 9.	シジャパンマC	1990. 5.21	59	242	
035	石井伸一	1944. 3.	チャー・オユー	1944. 3.24	59	188	

順位	氏名	生年月日	山名	登頂年月日	年	日	*
036	佐藤 邦彦	1943. 4.	チャー・オユー	2002. 9.30	59	182	
037	f 日比 栄子	1942. 6.	チャー・オユー	2001. 9.22	59	109	
038	白井 和美	?	チャー・オユー	2003. 9.27	59		
039	花崎 洋	1943.10.	チャー・オユー	2002.10. 1	58	348	
040	f 安野 立子	1946.10.	チャー・オユー	2004. 9.27	58	335	
041	森山 勇	1939.10.	ガッシャーブルムⅡ	1998. 7.22	58	288	
042	斎藤 祐一	1947. 1.	シジャパンマC	2004. 9.27	58	243	
043	×根津 皖一	1939.12.	ガッシャーブルムⅡ	1998. 7.22	58	206	Ⅲ
044	青木 丈夫	1943. 2.	ガッシャーブルムⅡ	2001. 7.11	58	154	
045	×小西 政継	1938.11.	マナスル	1996. 9.30	57	315	Ⅲ
046	f 河野 千鶴子	1946.10.	チョモランマ	2004. 5.20	57	226	Ⅱ
047	川原 慶紀	1940.11.	チョモランマ	1998. 5.20	57	182	Ⅱ
048	f 田部井 淳子	1939. 9.	チャー・オユー	1996. 9.20	56	363	Ⅲ
049	f 佐藤 智恵子	1946.10.	チャー・オユー	2003. 9.21	56	343	
050	安村 淳	1946. 8.	チョモランマ	2003. 5.21	56	270	Ⅲ
051	池田 錦重	1938.11.	ダウラギリⅠ	1994.10. 1	55	312	Ⅱ
052	f 大神田 伊曾美	1944. 5.	チャー・オユー	1999. 9.26	55	145	
053	泉田 清幸	1948. 3.	チョモランマ	2003. 5.22	55	55	
054	田中 基喜	1948. 7.	チョモランマ	2003. 5.22	54	299	Ⅱ
055	宮崎 勉	1947.11.	チョモランマ	2002. 5.17	54	187	Ⅵ
056	野口 光二	1947.11.	チョモランマ	2002. 5.25	54	185	
057	鈴木 孝雄	1938. 5.	チャー・オユー	1992. 9.20	54	125	Ⅱ
058	芳田 猛則	?	チャー・オユー	2003. 9.27	54		
059	大蔵 喜福	1951. 2.	シジャパンマC	2004. 9.27	53	262	Ⅳ
060	f 谷口 由利子	1949.12.	チャー・オユー	2003. 9.27	53	301	
061	荒木 富美雄	1949. 9.	チョモランマ	2003. 5.21	53	241	Ⅱ
062	f 日野 美紀江	1950. 2.	チャー・オユー	2003. 9.27	53	217	
063	山下 きよし	1950. 7.	チャー・オユー	2003. 9.21	53	59	
064	f 茂木 康枝	1950. 8.	チャー・オユー	2003. 9.27	53	41	
065	池田 壮彦	1946.10.	ナンガ・バルバット	1999. 7.28	52	274	Ⅱ
066	畠山 正昭	1943. 2.	チャー・オユー	1995.10. 1	52	219	
067	保坂 昭憲	1948. 2.	チョモランマ	2000. 5.17	52	90	Ⅱ
068	f 倉井 登代	1940. 5.	チャー・オユー	1992. 9.20	52	48	
069	林 孝治	1951. 9.	チャー・オユー	2003. 9.21	51	356	Ⅲ
070	×日野 悦郎	1940. 5.	シジャパンマC	1992. 5. 6	51	346	Ⅱ
071	佐藤 信二	1950. 7.	チョモランマ	2002. 5.25	51	327	
072	山下 健夫	1949. 1.	チョモランマ	2000. 5.19	51	136	
073	柳田 住吉	1951. 5.	チャー・オユー	2002. 9.30	51	126	
074	田村 正勝	1942. 4.	ブロード・ピークM	1993. 7.21	51	90	
075	斉藤 勤	1947.12.	ダウラギリⅠ	1998. 9.30	50	287	
076	八嶋 寛	1950. 3.	チョモランマ	2000. 5.17	50	68	Ⅱ

50歳代(46名・内女性10名) 50歳以上実登頂者(76名・内女性16名)

ブロード・ピーク入山者 [1977-2000=24年間]

(注)派遣母体名の後ろの()内は、登山隊+報道等であるが、学術隊員、医師等は登山隊員とした。氏名の前の×は、その登山で死亡した者。

[1] 1977年夏

愛知学院大学(13)

隊長：湯浅道男(41)／隊員：大野紀和(33)、寺西邦夫(31)、伊藤賢治(30)、辻美行(30)、伊藤昌弘(29)、桜井洋介(28)、本郷三好(26)、野呂和久(26)、尾崎隆(25)、多田光孝(22)、浜谷光安(20)、鈴木清彦(20)

[第二登を目指して西面初登ルートに入山。7月7日、ゴドウィン・オースチン氷河の4,900m地点にBC設営。下部はポーランド隊と同じ中央ルンゼをルートにとった。11日C1(5,450m)、23日C2(6,200m)、28日C3(6,900m)、8月2日、C4を7,500m地点に建設。8日、辻、野呂、尾崎が主峰と中央峰のコルを経由して、1957年の初登頂に次ぐ第二登に成功した。]

[2] 1985年夏

関西カラコルム(8)

隊長：賀集信(36)／隊員：重廣恒夫(38)、和田城志(36)、西堤理一(34)、藪川洋一(23)、山本宗彦(26)、外山哲也(27)、龍田雅史(25)

[マッシュャーブルム(7,821m)北西壁初登攀を終え連続登頂を目指して、8月3日通常ルート5,200m地点にBC設営。アルパイン・スタイルで登攀。雨のため8日まで停滞し、9日6,500m、10日7,000m、11日(7,850m)II到達し、分散ビバークとなる。翌日、和田、山本、外山が登頂し、藪川は下山した。下でビバークした賀集、重廣、西堤も続いて登頂したが、龍田と連絡官は頂上手前の8,030mで登頂を断念し引き返した。アルパイン・スタイルを目指したが、同時期他の隊もルート上で行動していた。]

[3] 1988夏

昭和山岳会(5)

隊長：酒井國光(49)／隊員：島方健次(40)、佐々

木正人(37)、矢作直子(39)、松元サチ(32)

[通常ルートからの登頂を目指し5月21日BC(4,950m)設営。25日C1(5,450m)、6月4日C2(6,250m)、10日C3(6,850m)、16日C4(7,400m)建設。BCで休養の後、島方、矢作が先行してアタックしたが失敗。27日、C4からアタックした酒井、島方、佐々木、松元が登頂に成功し、酒井は8,000m峰の日本人最年長記録を更新した。]

[4] 1988年夏

富山県山岳連盟(13)

隊長：佐伯尚幸(48)／隊員：谷口守(39)、川端聡(40)、尾竹正達(35)、浄土弘一(31)、沢崎正一(39)、高島石盛(40)、多賀谷治(31)、高瀬洋(31)、金山康成(23)、斎藤順二(23)、荒木克昌(20)、霜田光義(31)

[通常ルートからの登頂を目指し、7月4日BC設営9日C1(5,450m)、18日6,200m地点にC2。26日C3(6,900m)、30日C4(7,400m)建設しBCで休養。C3、C4を再建した後、8月12日、谷口、尾竹、浄土、金山、斎藤がC4からアタックしたが、尾竹、浄土、金山は8,035mの前峰で登頂断念。谷口、斎藤が主峰の登頂に成功した。]

[5] 1989年夏

川崎市教員(8)

隊長：坂原忠清(44)／隊員：松井公治(38)、岡林良一(37)、林田孝夫(43)、戸高雅史(27)、名取重広(28)、細田一郎(38)、尾谷寛一(25)

[通常ルートからの登頂を目指して8月6日BC設営。7日C1(5,800m)、12日6,660m地点にC2。17日C3(7,300m)、21日C4(7,720m)建設。24日坂原、戸高のアタックは風雪と深いラッセルで失敗し、2日後の細口、戸高のアタックも失敗に終わった。]

[6] 1991年夏

イエティ同人(4)

隊長：遠藤晴行(31)／隊員：遠藤由加(26)、戸

高雅史(29)、鈴木ほなみ(34)

[通常ルートからの登頂を目指して5月28日BC設営。6月10日までに二つのキャンプを設け6,660mに到達した。寡雪のため氷が露出しロープを固定した。16日C3(7,100m)を建設し鈴木を除く3名でアタックする予定であったが吹雪で断念。25日まで降雪。28日も降雪で断念。7月2日C3入りしたが、続く3日間吹雪で停滞し、登頂を断念した。]

[7] 1991年夏

東京農業大学(6)

隊長：早坂敬二郎(44)／隊員：八幡敏正(41)、小笠原岩雄(38)、佐藤正倫(27)、谷川太郎(24)、加藤和夫(62)

[通常ルートからの登頂を目指して6月4日BC設営。先行していたイエティ隊のルートが使えたので体力・時間共に恩恵を受けた。14日C1(5,750m)、22日C2(6,350m)、30日にC3(6,900m)、7月11日C4(7,450m)を建設し、翌日、BCマネージャーの加藤を除く全員が登頂した。]

[8] 1991年夏

東京スキー山岳会／パインニアソブ(8)

隊長：川嶋保幸(43)／隊員：小西浩文(29)、若林次生(37)、阿部正巳(36)、長尾妙子(35)、増田隆(30)、吉村哲明(29)、山野井泰史(26)

[通常ルートからの登頂を目指して6月17日BC設営。21日C1(5,500m)、26日6,250mにC2、7月2日C3(7,100m)建設。12日のアタックは農大の後を追ひ、小西、増田、吉村、山野井が7,900mまで登ったが断念し下降。下山中に増田が7,600m地点で滑落し背中を強打したためBCからヘリで下山した。29日C4(7,450m)を建設し、翌日、小西、阿部、長尾、吉村、山野井が登頂に成功した。]

[9] 1993年秋

日本ブロード・ピーク(9)

隊長：関根幸次(59)／隊員：遠藤京子(55)、伊藤守(38)、澤田幸子(52)、田村正勝(51)、工藤敦子(33)、中山裕朗(29)、辻信広(22)

[通常ルートからの登頂を目指し、6月21日BC設営。23日(5,800m)、30日C2(6,300m)

7月6日(6,900m)の荷揚げを終える。21日、C3を午前2時に出発した田村、辻とHAPは標高差1,100mを酸素を用いずに登り午後1時半、主峰の登頂に成功した。]

[10] 1993年夏

東海山岳会(7)

隊長：田辺治(38)／隊員：江塚進介(52)、河口攻(37)、三野和哉(34)、中村貴士(36)、内田健一(30)、小川裕正(31)

[通常ルートからの登頂を目指して7月17日BC設営。先行パーティのルートが使えたので順調に進んだ。24日C1(5,800m)、28日C2(6,250m)、29日C3(6,950m)へ荷揚げを終えアタック体勢を整えた。しかし、その後、8月12日まで悪天候のためBCで停滞となった。15日の小川を除く6名によるアタックは7,750mで失敗。18日の田辺、江塚、三野、中村によるアタックも7,800mで断念しBCへ下降。22日C3入りした田辺、江塚、中村、内田は、翌日7,600mに雪洞を掘ってビバークし、24日10時15分登頂に成功した。]

[11] 1995年夏

FOS(4)

隊長：戸高雅史(33)／隊員：北村俊之(32)、服部徹(25)、戸高優美(25)

[北峰～中央峰～主峰への縦走を目指して入山。勿論、アルパイン・スタイルでの登攀である。まず、高所順応と下降路の偵察を兼ねて、主峰の通常ルートの7,000mと7,400m地点まで登った。7月14日、BCマネージャーの優美を除く3名でBCを出発し、この日は北峰の6,400m地点まで。15日、北峰7,100m地点まで。16日、午後4時半に北峰登頂。中央峰とのコルでビバーク。17日、主に中国側を登って中央峰手前の肩まで。18日、10時半、中央峰登頂。雪稜1ピッチ、懸垂下降5ピッチで中央峰と主峰のコルに降りてビバーク。19日10時半、主峰に登頂、西稜の7,000m泊まり。20日、BCへ帰着。こうして日本人初の八千メートル峰のアルパイン・スタイルによる縦走が成し遂げられた。]

[12] 1996年夏

江北山の会(1)

隊長：細田一郎(45)

[通常ルートからの登頂を目指してH A P 1名を伴って、7月20日B C設営。25日、5,800m地点にC 1、28日C 2(6,200m)、30日C 3を7,000m地点に建設しB Cへ下降。8月2日から7日まで悪天のためB C停滞。11日7,400にC 4建設。13日単独で7,700mまで到達しピバーク、そこが最高到達点となった。]

[13] 1997年夏

静岡市山岳連盟(9)

隊長：松永義夫(49)／隊員：杉本宣明(59)、久保田保雄(52)、榛地良行(39)、久保田正己(50)、×横田川福造(47)、鈴木達夫(47)、小田直美(43)、村松正祥(32)、倉本浩(26)

[通常ルートからの登頂を目指して、5月26日B C設営。6月2日(5,800m)、8日6,400m地点にC 2建設。16日、C 3予定地(6,850m)までルート工作し、予定地に到達した横田川とバブが、数メートル下った所で足元から雪崩が発生し、二人は巻き込まれた。直ぐ下にいた鈴木は、デブリの末端で止まったが、横田川とバブは行方不明となっていたが18日、下部で発見された。]

[14] 1997年秋

群馬県山岳連盟(7)

隊長：佐藤光由(36)／隊員：吉田秀樹(44)、吉田文江(41)、梁瀬佐市(40)、岩崎洋(37)、中島剛二(35)、福本誠志(23)

[ガッシャーブルム I 峰との連続登頂を目指して、通常ルートに入山。6月16日B C設営。日C 1(5,450m)、日C 2(6,200m)、日C 3(6,900m)、日C 4(7,400m)建設し、7月16日、佐藤、両吉田、岩崎、梁瀬、福本が登頂に成功した。]

[15] 1997年夏

群馬県山岳連盟(6)

隊長：後藤文明(41)／隊員：尾形好雄(44)、野沢井歩(42)、寺田勉(43)、綿貫剛(42)、田島崇行(40)

[ガッシャーブルム II の登頂を終え、連続登頂を目指して7月17日B C設営。キャンプは先行

した佐藤班のものを利用した。20日C 4を午前3時に出発した後藤、尾形とH A Pが9時26分に登頂に成功した。]

[16] 1999年夏

江北山の会(1)

隊長：細田一郎(48)

[通常ルートからの登頂を目指してH A Pを伴って入山。単独で7,500mに達したが登頂を断念した。]

[17] 2000年夏

日本勤労者山岳連盟(3)

隊長：近藤和美(58)／隊員：倉橋秀都(40)、永田幸一(42)、橋本久(47)、矢野利明(47)、小山素子(40)、島田恭司(52)、金子博(52)、松本政英(36)、上野幸人(46)

[通常ルートからの登頂を目指して、6月10日B C設営。17日C 1(5,800m)、18日6,250m地点にC 2、30日C 3(6,950m)、7月16日C 4(7,380m)建設するが悪天のため翌日B Cへ下降。25日、倉橋、矢野、松本がアタックするが、矢野は前峰から下降し倉橋と松本はピバーク。翌日、倉橋と松本は登頂に成功。29日7,700mのキャンプに入った近藤、矢野とH A Pが翌日登頂に成功した。]

[18] 2000年夏

愛知県山岳連盟(4)

隊長：名塚秀二(45)／隊員：久保田昌幸(33)

[通常ルートからの登頂を目指して入山。7月29日、名塚が登頂に成功した。]

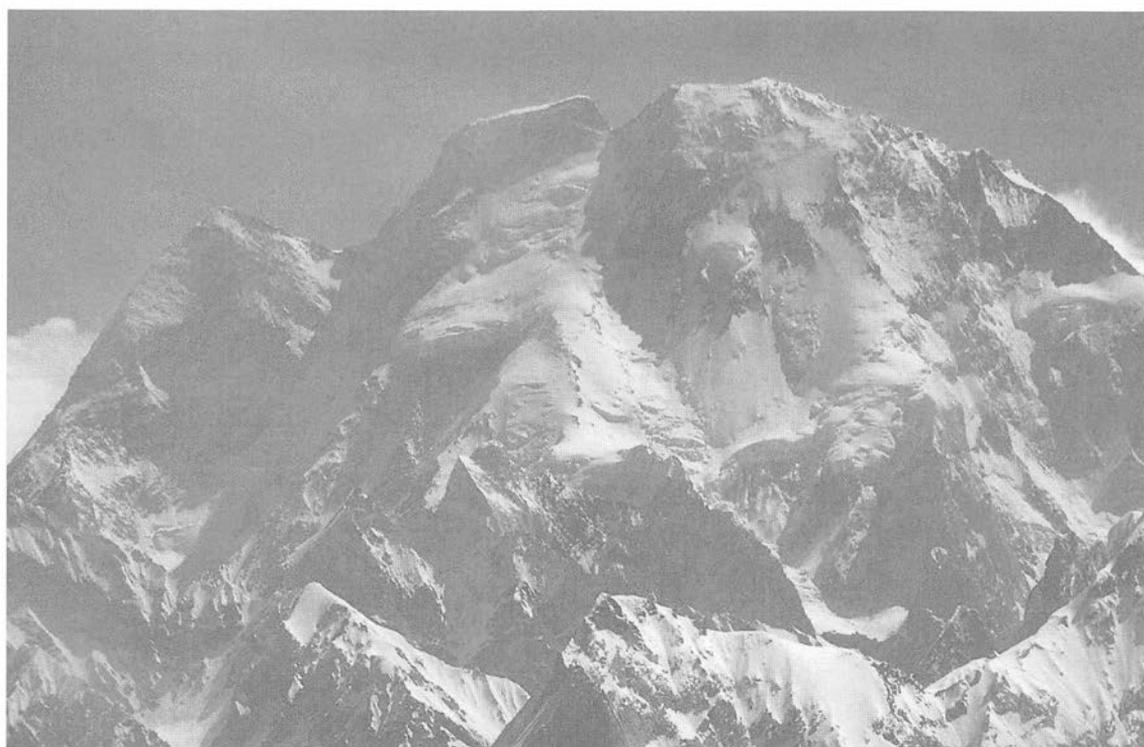
20世紀日本人ブロード・ピーク登頂者リスト

	氏名	生年月日	登頂年月日	年令
1	辻 美行	1947.06.	1977.08.08	30〇
2	野呂 和久	1951.08.	1977.08.08	25〇
3	尾崎 隆	1952.09.	1977.08.08	24〇
4	山本 宗彦	1959.12.	1985.08.12	25
5	和田 城志	1949.10.	1985.08.12	35
6	外山 哲也	1958.02.	1985.08.12	27
7	重廣 恒夫	1947.10.	1985.08.12	37
8	西堤 理一	1951.12.	1985.08.12	33

	氏名	生年月日	登頂年月日	年齢
9	賀集 信	1949.01.	1985.08.12	36
10	佐々木正人	1951.03.	1988.06.27	37
11	島方 健次	1947.12.	1988.06.27	40
12	松元 サチ	1956.03.	1988.06.27	32
13	酒井 國光	1939.04.	1988.06.27	49
14	谷口 守	1948.12.	1988.08.12	39
15	斎藤 順二	1964.10.	1988.08.12	23
16	谷川 太郎	1967.06.	1991.07.12	24
17	×佐藤 正倫	1963.08.	1991.07.12	27
18	八幡 敏正	1950.03.	1991.07.12	41
19	小笠原岩雄	1952.11.	1991.07.12	38
20	×早坂敬二郎	1946.08.	1991.07.12	44
21	小西 浩文	1962.03.	1991.07.30	29
22	長尾 妙子	1956.03.	1991.07.30	35
23	山野井泰史	1965.04.	1991.07.30	26
24	阿部 正巳	1954.10.	1991.07.30	36
25	吉村 哲明	1961.07.	1991.07.30	29
26	辻 信広	1970.09.	1993.07.21	22
27	田村 正勝	1942.04.	1993.07.21	51
28	内田 健一	1967.12.	1993.08.24	26

	氏名	生年月日	登頂年月日	年齢
29	田辺 治	1961.01.	1993.08.24	32
30	中村 貴士	1966.12.	1993.08.24	26
31	三野 和哉	1964.10.	1993.08.24	28
32	江塚 進介	1961.04.	1993.08.24	32
33	戸高 雅史	1961.12.	1995.07.19	33◎
34	北村 俊之	1962.08.	1995.07.19	32◎
35	服部 徹	1970.01.	1995.07.19	25◎
36	佐藤 光由	1961.04.	1997.07.16	36
37	岩崎 洋	1960.02.	1997.07.16	37
38	×福本 誠志	1973.12.	1997.07.16	23
39	梁瀬 佐市	1957.06.	1997.07.16	40
40	吉田 秀樹	1953.05.	1997.07.16	44
41	吉田 文江	1955.10.	1997.07.16	41
42	後藤 文明	1965.05.	1997.07.16	32
43	尾形 好雄	1948.07.	1997.07.20	49
44	倉橋 秀都	1960.02.	2000.07.26	40
45	松本 政英	1963.07.	2000.07.26	36
46	×名塚 秀二	1954.11.	2000.07.29	45
47	矢野 利明	1952.11.	2000.07.30	47
48	近藤 和美	1941.11.	2000.07.30	58

(注) ○は日本人初登頂 ◎は北峰～中央峰からアルパイン・スタイルによる縦走



▲マッシャーブルムC3からのぞむ、左から北峰、中央峰、主峰（主峰の左が前峰）〔ヒマラヤへの挑戦〕より

HAJ販売書籍案内

書名	価格	送料
1. 雪の住処35年の記録 (HAJ 創立35周年記念誌)	3,500円	(450円)
2. 天壇の山に挑む (ミニヤ・コンカ1991年隊)	2,500円	(310円)
3. 秀麗ヌン峰を攀じる (1991年隊)	2,000円	(240円)
4. 千人の悪魔の峰、マモストーン・カンリ (1984年隊)	1,000円	(240円)
5. 烈風の彼方へ、冬期マナスル (1982年隊)	1,500円	(240円)
6. ナンダ・カート (1981年隊事故報告)	2,000円	(340円)
7. 聖地巡礼の旅 (サトパント1990年隊)	2,000円	(240円)
8. “神の河” ブラマプトラの激流を下る (1990~1991年)	2,500円	(240円)
9. 麗しき四川の夏 雪宝頂登頂 (1991年隊)	1,000円	(240円)
10. 東部カラコルム	2,000円	(240円)
11. ナマステ、サラスワティ (1992年隊)	2,000円	(310円)
12. 崑崙の頂を踏む、青海・玉珠峰 (1993年隊)	1,000円	(240円)
13. 天女の山 (玉虚峰) (1994年隊)	1,000円	(240円)
14. ヒマラヤ、そして仲間達へ (ケダルナート・ドーム1980年隊)	1,500円	(310円)
15. ルンボ・カンリ (1994年隊)	1,500円	(240円)
16. 中国登山の手引き (第5版)	3,000円	(340円)
17. ニンチン・カンサ (1997年隊)	1,600円	(210円)

■ 寸 感 ■

山岳4団体(日山協、労山、JAC、HAJ)とHK Tが、平成16年度から「高峰登山調査用紙(計画書と報告書)」を統一した。しかし、その徹底を計るための宣伝がうまく行っていない。そこで4団体では「山と溪谷」と「岳人」に有料広告を出すことで合意し実施した。拠出金額のこともあり「山と溪谷」は半ページ、「岳人」は1ページとした。山と溪谷は「1月号」に掲載されている。どこに載っているか一度確認してもらいたい。

その山と溪谷社が平成17年2月14日から移転、〒107-8410 港区赤坂1-9-13 三会堂ビル1階 ☎ 03-6234-1600(代)、6234-1607(山溪)となる。「岳人」は2月号に掲載されることになっている。(山森)

- 2日(木) 労山「望年会」於：エミール(山森)
 5日(日) 阿部淳氏「お別れ会」於：札幌(尾形、大内)
 7日(火) 「新日本ヒマラヤ会議(第2回)」山と溪谷、岳人へ掲載依頼
 11日(土) 第6回「HAJ華甲望年会」於：かんぼヘルスプラザ東京(76名)
 22日(水) 東京集会(8名)
 25日(土) 仕事納め

ヒマラヤ No.399 (2月号)

平成17年1月10日印刷 17年2月1日発行
 発行人 山森 欣一
 編集人 山森 欣一
 発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
 萬栄ビル501号
 電話 03-3988-8474
 郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

事務局日誌 (12月)

遙かなる高みへ



トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします
 ~ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米~

◆格安航空券のご相談は◆
キャラバンデスク
 (東京) ☎03(3237)8384 (直通)
 (大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本社 / 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1
 岩波書店アネックス5F ☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396
 ■大阪営業所 / 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F
 ☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966
 西遊旅行ホームページ (http://www.saiyu.co.jp) お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル ☎0120-811391
 (通話料無料) をご利用下さい。

株式会社 西遊旅行

東京新聞の山岳書

東京新聞出版局 中日新聞東京本社
 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-1-4 日比谷中日ビル6F
 [TEL] 03-3595-4830 (代) [FAX] 03-3595-4831
 http://www.tokyo-np.co.jp/tbook/

<h3>山書散策</h3> <p>河村正之 著</p>	<h3>登山の運動生理学百科</h3> <p>山本正嘉 著</p>	<h3>女性ガイドのしなやか登山術</h3> <p>樋口英子 著</p>	<h3>新・山の雑学ノート・第1集</h3> <p>岳人編集部 編</p>	<h3>中高年の雪山入門</h3> <p>福島正明 著</p>	<h3>すぐ役立つ 山のメモ帖</h3> <p>岳人編集部 編</p>	<h3>すぐ役立つ 山のメモ帖</h3> <p>廣川健太郎 著</p>	<h3>チャレンジャーアルパインクライミング</h3> <p>【南アルプス・八ヶ岳 谷川岳編】 廣川健太郎 著</p>	<h3>チャレンジャーアルパインクライミング</h3> <p>【北アルプス編】 廣川健太郎 著</p>	<h3>山小屋の主人の炉端話</h3> <p>工藤隆雄 著</p>	<h3>ベシック・フリークライミング</h3> <p>菊地敏之 著</p>	<h3>最新クライミング技術</h3> <p>菊地敏之 著</p>
<p>今まで数多く発行された山書。何を讀んたらよいか、そんな時の指針として——「岳人」連載時から好評。</p>	<p>「どうして合理的で安全な登山ができるのかを、ヒマラヤなど高所登山実感を踏まえて、分かりやすくまとめた。」</p>	<p>常識にとらわれず、自在に知恵を働かせれば山はもっと素敵になると呼ばれる。女性登山ガイドのユニークな登山講座。</p>	<p>山での話題が登った山の数だけではつまらない。豊かな雑学が登山をより楽しくより安全にしてくれる。</p>	<p>登山の実践から環境問題、山の文化誌にいたるまでさまざまな話題を提供。</p>	<p>低山から夢のヒマラヤまで。トラバを未然に防ぎ、白銀の大自然を満喫しながら、雪山歩きを楽しもう。</p>	<p>登山の実践から環境問題、山の文化誌にいたるまでさまざまな話題を提供。</p>	<p>上巻の北アルプス編に続いて、南アルプス、八ヶ岳、谷川岳などから、日本を代表するアルパインクライミングの本。写真を豊富に使ってわかりやすく解説したルートガイドの決定版。</p>	<p>北アルプス全域を代表する7ルートを紹介、分かりやすくカラー写真で解説したルート案内書。夏の岩壁、雪後のパリエーションルートに加え、これまでほとんど紹介されていない冬期岩壁登攀、ルンゼ登攀を紹介。</p>	<p>著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る入話の取り纏めのお話。</p>	<p>新しい生涯スポーツとしてあらゆる世代に親愛的な人気のフリークライミングを、ムーブの作り方、ロープワーク、自然壁の登り方、スキップのしかたを取り組み方を必達不可欠な多項目にわたって、ビジュアルにわかりやすく、かつ理論的に解説。ジムから始めてアウトドアを目指すすべてのクライマーのための教科書の決定版。</p>	<p>フリークライミングからマルチピッチ、アルパイン、ビッグウォールまですべてのロッククライマーへの、実践的な最新技術書。二つとらの技術を、単なるマニュアルとしてではなく、その意味や選択基準までを含め解説。</p>
1,575円	2,100円	1,575円	1,470円	1,680円	1,470円	2,625円	2,625円	1,575円	1,785円	1,680円	

※定価額に消費税も含まれています。

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

ICI本店	〒169-0073	東京都新宿区百人町2-1-2	03-3208-6601	新潟とやの店	〒950-0982	新潟県新潟市堀之内南1-16-52	025-241-5134
新宿西口店	〒160-0023	東京都新宿区西新宿1-16-7	03-3346-0301	仙台店	〒983-0852	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8	022-297-2442
神田登山店	〒101-0051	東京都千代田区神田神保町1-6-1 (タキビル2F)	03-3295-0622	秋田広小路店	〒010-0001	秋田県秋田市中通1-4-5	018-884-1771
神田本館	〒101-0051	東京都千代田区神田小川町3-10	03-3295-3215	盛岡大通店	〒020-0022	岩手県盛岡市大通1-10-16	019-626-2122
八王子店	〒192-0081	東京都八王子市横山町3-12	0426-46-5211	札幌店	〒060-0062	北海道札幌市中央区南二条西4-8	011-222-3535
大宮店	〒330-0802	埼玉県さいたま市大宮区宮町1-37	048-641-5707	北十二条店	〒001-0012	北海道札幌市北区北十二条西3-5	011-747-3062
高崎店	〒370-0831	群馬県高崎市新町5-3	027-327-2397	伏古店	〒007-0861	北海道札幌市東区伏古一条4-1-45	011-787-0233
川越店	〒350-0045	埼玉県川越市南通町14-4	0492-26-6751	大阪ミナミ店	〒556-0005	大阪府大阪市浪速区日本橋4-9-17	06-6636-2470
甲府店	〒400-0814	山梨県甲府市上阿原町481-1	055-221-0141	神戸三宮店	〒650-0021	兵庫県神戸市中央区三宮町1-3-10	078-335-0355
宇都宮今泉店	〒321-0962	栃木県宇都宮市今泉町1560	028-639-9650	外商部 (メールオーダー係)	〒169-0073	東京都新宿区百人町2-1-2	03-3200-7219
太田高林店	〒373-0825	群馬県太田市高林東町1386	0276-38-0620				
松本店	〒390-0874	長野県松本市大手3-4-24	0263-36-3039				
長野店	〒380-0825	長野県長野市末広町1356	026-229-7739				
茅野駅前店	〒391-0001	長野県茅野市茅野3502-1	0266-82-8510				
新潟店	〒950-0087	新潟県新潟市東大通2-5-1	025-243-6330				

 **ICI 石井スポーツ**